

栄光

説教・	
「共に祈ろう、信仰があなたを救う」	
種房正勝牧師…1	
夏の集い……………2	
特集・海に想う…4	
私の戦争体験記	
……………6	
伝道師の書き込み…7	
牧師の書斎から…7	
長老のファイル…8	

説教 『共に祈ろう、信仰があなたを救う』 サムエル記下24章1節～17節 ルカによる福音書5章17節～26節

上野教会牧師 種房正勝

わたしたちは、今、コロナウイ

で、こともあろうに、「主の怒り

ルス禍という疫病蔓延の大変な状

が再びイスラエルに対して燃え上

況下にあります。そして、全国各

が、イスラエルとユダの人口を

地の諸教会に在っては、主イエス

数えよ」(24・1)と、主がダビ

の体なる教会で、主日礼拝を守り

デを誘われた、即ち試された、の

たいと願うわたしたちの神への信

です。ダビデは、統一イスラエル

仰さえもが、家庭における礼拝と

王国の建設が、主なる神の庇護の

か、インターネットによるライブ

もとに為されたことを忘れ、あた

配信等に切り替えることを強いら

かもダビデ自身の力でなされたか

れ、教会に集わなくても礼拝が

のごとく驕り昂りました。神へ

守れるという風潮に流されそうに

のへりくだった感謝を忘れ、王国

なってしまう危険をはらんでいま

の繁栄が自分の力でなされたと過

す。このような常ならざる状況の

信したダビデは、王国の更なる発

下で、わたしたちの信仰を、「守

展を願い、すなわち「むさぼる」

る」という受け身の捉え方ではな

人口調査を実行します。

く、一層強め、そして高めていく

「むさぼる」とは、必要以上に

ことが出来るのでしょうか。

求めることです。イエス・キリス

今朝お読みしたサムエル記下

トの真髄である「十字架の死に至

は、信仰の人ダビデ王を読える物

るまで父なる神に従順でした」(フ

語です。しかし、その最後の24章

イリピ2・8)という「へりくだ

り」を怠ったダビデに、神は3日
間に及ぶ疫病を罰として選ばせま
す。

ダビデが疫病を選んだ根拠は、

ダビデの福音信仰にありました。

それは、一つには、今朝皆様と一

緒に交読した詩編62篇2～7節に

ある、「神はわたしの岩、わたし

の救いであり、神にのみわたしは

希望をおいており、わたしは動揺

しない」という信仰であります。

二つには、詩編62篇8節以降の、

王国の救いと栄えとは神にかかっ

ている、だから、民よ、どんな時

にも神を信頼し、「御前に心を注

ぎ出せ」と謳う神へのダビデの

信仰の核心であります。

憐れみや救いは神からのみもた

らされます。ですからわたしたち

は、「心を注ぎ出す」ほどに、神

に真剣に祈るのであります。神は

そのような真剣に祈るわたしたち

に必ず応えてくださる慈悲深いお

方であることを、ノアの箱舟の洪

水物語からも、二ネベの都市を破

壊しつくされないヨナ書からも学

びます。ルカ福音書の5・17以下

でも、屋根の瓦を剥がしてまでも

中風の病人をイエスの元に担いで

きた仲間たちの信仰を見て、イエ
スは「人よ、あなたの罪は赦され
た」(ルカ5・20)、と病人を癒し
ます。

神にしか癒すことができないと

いう人々の神への微動だにぶれな

い信仰、イエスが神であられると

いう信仰、神に祈ることによって

しか救いはないという信仰、神に

徹底して「御心ならば」と、へり

くだる救いへの祈り、これらの心

から注ぎ出される主への信仰告白

に、主なる神は必ず応えてくださ

います。なぜなら、わたしたちの

信じる神は、その御子イエスを十

字架上で贖いとして差し出してく

ださるほどに、被造物であるわた

したちを愛してくださるのです。

わたしたちは、困難な時に在れ

ばあるほど、神に心を注ぎ出して、

中風の人を救った仲間たちと同じ

ように、共に祈ることが必要です。

わたしたちの祈りが独りよがりにな

らないためにも、皆と心を一つ

にして祈るのです。祈りは、救い

をもたらします。なぜなら、わた

したちの救いは神にしかなく、祈

りは神が備えてくださる力です。

夏の集い

「律法主義がもたらすもの
—旧約時代の律法と新約時代
の律法の完成を通して—」

マタイによる福音書
5章3～12節

上野教会牧師 種房惇子



経堂北教会
での信仰の交
わりの中で、
共に祈り励ま
し合ってきた
敬愛する岸牧
師や兄弟姉妹
と、再び一緒
に主を賛美礼

拝できたことは至上の喜びでした。主の計り知れない御業を心からほめ讃えます。壇上から懐かしい兄弟姉妹の顔が目に入り、変わらず礼拝を守り続ける祝福された姿に感動を覚えました。

経堂北教会の年間テーマが「共に祈り、伝え、献げよう」だと知り、直ぐに3年半の上野教会での宣教で体験した律法主義の問題が浮かびました。教会が主にある信仰共同体として、神の国の福音を

喜びをもって受け、伝えようとする時に遭遇する問題でした。

旧約時代も新約時代もその教えの根底には神の愛がありました。

旧約の教えの基本である律法は、罰するためではなく、神とも隣人とも平和な関係を保つよう神から恵みとして付与されたのです。神は

律法の戒めと定めと掟により民を正しく導こうとされました。それでも背き続ける民に対して神は救いの希望を与えられたのです。エ

レミヤ書31章の「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る。…わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す」がそれです。

古い契約は、神から付与された十戒であり、新しい契約は、主イエスが生涯やその生き方を通して、特に十字架の死の血潮により成される契約の預言でした。新約の教えの基本は、十字架と復活による

神の赦しと神との正しい関係の回復でした。マタイ5章17節で「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためではなく、完成するためである」と主は言われました。

板に書かれた律法に代わって、

主イエスがその生涯を通して、「律法に生きること」がどういふことを示されたのが、「山上の説教」でした。十戒の現代版といえるものです。モーセに与えられた律法を超えて、主イエスが示された完全な生涯、死に至るまで神に従順だった主イエスの生き方があるのです。従って、十字架と復活の意味が理解できなければ、山上の説教で語られる貧しさや悲しみの真意は分からないのです。

律法主義が辿る道は、「心の貧しい人」の道とは正反対です。ロマ書の「律法自体は正しい教え、善いものであり、信仰故に律法を守ろうとするその志も良いこと」です。問題なのは、自分の力を過信し、自力で教を守り善い行いをしようとする時です。そこに神は存在せず、自己の功績のみがあるのです。自らの行いを誇ることで罪なのです。更に、私たちは律法を守ることに励む中ですら、気付かず罪を犯すことがあります。熱心に主に従い、信仰により清さ正しさに生きようと努力する中で罪が芽を出します。私たちは、他者の僅かな過ちを看過できず、

裁き、交わりを断つことは無いでしょうか。主が求められる清さとは愛と一体になる清さです。正に主イエスが辿られた生涯が、律法の真の意味を示しているのです。

神が求められるのは、砕かれた貧しい心であり「天の国はその人たちのもの」です。自らの弱さを知り、ただ神の憐れみを信じて謙虚に従う信仰が、真の平安をもたらすのです。私たちを愛し救うために十字架の死も厭わなかった主イエスの「幸いだ」の言葉を信じ続けることです。困難や失望や躓きの中でもなお、神の赦しと救いの恵みが厳然と存在し、私たちを支え捉え続けていることを信じて、歎びと感謝をもって礼拝を献げることがキリスト者の生活です。神に義とされるものを何も持ち合わせない私たちが、神に赦され救われる身に余る恵みに感謝し、神をほめ讃え、神のもとに立ち続けることです。結局は、行いではなく神をどこまでも信じ続ける揺るぎない信仰が大切なのです。旧約に隠されている神のご計画、み旨はイエス・キリストの出来事によって成就されたのです。

夏の集いに出席して

岡田 基

種房牧師ご夫妻をお招きしての「夏の集い」が開催されましたことを感謝いたします。

種房氏に初めてお会いしたのは百合ヶ丘駅前「フローラ」での百合伝道所主日礼拝でした。大柄のお体からこぼれるような笑顔で屈託なくお話しされる様子は、流石商社マンだと思わされるものがありました。

今回、説教者として語られたご様子にも当時の面影を見ることが出来、とても懐かしい思いを持ちながら御言葉の解き明かしに耳を傾けました。同時に、同じ口から語られる言葉ですが、当時とは違った力強い聞く者を引き付ける何かを、またウィットに富んだ話し方の中にも聞く者への説得力を感じることが出来、感謝でした。

東神大夜間講座での学びを経て本校へと進学された当時のご決意に、背中を押された方の存在を覚えすには居られません。

詩篇62編、サムエル記下とルカ福音書の御言葉を通して言わんとするのは「人の力に頼るのでは

なく神にのみ頼るべきとする信仰が求められていることを忘れるな」ではないでしょうか。

病人を何が何でも癒していたきたい、それが出来になるのはこの方しか居ないのだ、との真剣な友を思う気持ちの熱意さが、屋根瓦を剥がすという途方もない行為にと走らせた友人たちの信仰に主イエスが応えてくださった、との解き明かしから、私たちの救いは神のみにある、主イエスのみにあるのだと改めて知らされた思いでした。

コロナ禍の中、困難な状況にあつてこそ自らの信仰の思いを高くし、主なる神への信仰が私たちの救いなのだ、感謝を忘れること無く、神への信仰が萎えないよう信仰生活に励むことの大切さを語ってくださいました。

「刃者の里です」と言われていましたが、遠い伊賀の国からお出かけくださった御言葉の解き明かしをいただきましたことを感謝いたします。お二人のお働きがこれからも主の祝福の中に置かれ続けますようにと祈らせていただきます。有難うございました。

再会の喜び

尾藤美紗子

緊急事態宣言が再度出されようとしていた7月11日、上野教会から種房牧師夫妻をお招きし、無事に「教会夏の集い」を開催することができた。出席者は70名。

ご夫妻は1988年12月から2006年6月まで経堂北教会に在籍、その後銀座教会へ転会、東神大公開夜間講座に出席したことから献身の道を志し、東神大へ編入。上野教会で伝道師として研鑽され、2020年に按手を受けられた。ご夫妻とも70歳を過ぎてから召命を受け牧師になられたことは大変な驚きで、当時の種房先生夫妻をよく知る者としてご夫妻をお迎えするのは非常に楽しかったです。同じ思いの出席者は多かったのではないだろうか。

正勝先生はダビデ物語から、ダビデの神様への信仰についてメッセージを語られた。まるでスポンジのように神様の御言葉を吸収し、喜びをもつてその恵みを伝えるその説教は熱量に満ち溢れ、私たちの心を熱くさせるものだった。

惇子先生の講演は、ご自身が献

身されるまでの道程において聖霊の働きが随所で与えられたこと、遣わされた上野教会で律法主義に陥りそうな状況に直面し、「真のキリスト者としての生き方とは何か」を教会全体で考え直すことにより、神様中心の生き方へと軌道修正されてきたこと等を話された。「教会のためだから」「こんなに私は教会のことを考えている」という思いが強くなるほど罪が芽を出す、との言葉は教会共通の課題ではないかと思わされた。全体的にとっても分かり易く、惇子先生のお人柄が滲み出る講演だった。

ご夫妻は東神大公開夜間講座で皆勤賞を受賞。教授陣や講座内容の充実ぶりを熱烈アピール、牧師への献身まで勧められ、お二人とも80歳近くとは思えないパワフルさ！

教会員時代のエピソードもいくつか伺い、懐かしさを感じつつ、年月を経て牧師になられたご夫妻への計り知れない神様のご計画に出席者一同感謝し、お二人との再会を共に喜ぶ豊かな時となった。

海に想う

海の季節がやってきました。聖書では、海は「大いなる」水と呼ばれています。

ふるさとの海、旅先で出会った海、楽しい思い出や時にはつらい思い出もあるでしょう。

あなたにとっての海は、どんな海ですか？

尾道の海

安部隆雄

私が育ったのは広島県尾道市です。向島、因島、生口島など大小の島々が並ぶ、典型的な瀬戸内海の小さな町です。現在は山の裏側（旧栗原村）が広く開発されていますが、昔は海に面した山の南側だけが街で、裏側は人もまばらな田畑でしたから。古くから物資の集散地の歴史があり、すぐ隣町は下駄や蘭草（イグサ）の産地でした。また千光寺、浄土寺など、山に沿って寺の多いところです。

家の前が海（尾道水道）で、砂浜はないので夏、子どもたちは海岸通からそのまま海に飛び込んで泳いでいました。家のすぐ斜め前に船着場があって、駅と乗船場の距離は200〜300メートルくらい、山と海の間が狭い町でした。

泳ぐだけなら目の前が海なので、いつでも泳げますが、白砂の

ある海岸となると小舟で岩子島まで出かけることもありました。夏は漁船の船泊まりで妹なんかは終日泳いで真っ黒になっていました。

第二次大戦から戦後にかけての大変な時代でしたが、子どもにとっては物資不足・食料不足の苦労は親が背負ってくれたので、不自由は当たり前と、ヘイキで遊んでいました。

高校2年後半から神戸、社会人になって東京、と住むところは変わったのですが、海と山が目と鼻の先にある小さな街で過ごした子どもの頃が、何もなかったけど物やお金に換算できない貴重な時間の思い出になりました。

“We live for love, and for hope and dreams, and for the small things that please us and for little else.” (Chekhov)

「人は愛に生き、夢と希望に生きる。そして喜びをもたらす極く些細なすべてのために。」（チェーホフ）

海に想う

國田あつ子

私にとっての海とは、夏休みに遊んだ海の記憶、海から飛び出すトビウオを間近く見て感動した荒波の日本海、英国北端の崖の上から見下ろした大西洋。与えられたテーマ「海に想う」の「想う」という字は「心」の上に「相」の字がある。これは頭で考えるだけでなく、心でイメージを見ることだという。確かに、海を想うと頭の中には旅で出会った懐かしい海の風景が甦る。

しかし、台風や地震が起これば、大洪水や津波で全てを飲み込んでしまう。人知の及ばない力で大災害をも引き起こす恐ろしい海でもある。

そして、海は世界を結ぶ。大昔、冒険心にあふれた人々が未知なる世界を求めて乗り出したのも海だった。

先日ある番組で、「海には雨や大地の河川から多くの水が注ぎ込む

のに、海の水は何故溢れないのか」という問いに、「海に注ぎ込まれる水の量と海の水が蒸発する量が丁度バランスがとれていて、殆ど水分量は変わらないから」という答えだった。なるほど、自然ってすごいなと思ったのだが、このバランスって永遠なのだろうかと疑問が湧いた。北極では氷が溶けている。ヨーロッパの氷河ももう危ないほど溶け出している。この先バランスが保たれるのだろうか。

神様は私たち人間に、実にいろいろな問題を突きつけてこられる。考えろと言われているのだと思う。SDGs が声高に唱えられ、ようやく世界中がエネルギーや環境問題を考え直すように変化し始めてきた。マイクロプラスチックが漂う海の映像を見たことがある。目に見えない程小さくて一見きれいな海だ。しかしこの肉眼では解らないプラスチックを海の魚が食べているのだ。美しい海をプラスチックの墓場にはしたくない。小さな力でも行動することが大切と海は教えてくれる。未来の人たちにとっても美しい海であって欲しいと願っている。主に祈りつつ。

私の目的地

桜岡 元

年に数回日本沿岸の船旅をする。大洗から苫小牧へ、又は新潟から小樽へと、出港してから30分も走ると大海原を進んでいる。陸地はもちろん島影さえも見えない。海の上とはいえ、視界は広くてもせいぜい半径7kmの範囲、太平洋の広さは1億5千万平方キロということとは全体の2百万分の1ほどしか見えていないことになる。自らが船長になったような気持ちになって海を見ていると、これはほぼ目を閉じて進んでいるのと同じだ。羅針盤を頼りに進まなければ何処にたどり着くかわからない。

航海と同様に、人生も視界の範囲はごく僅か、目を閉じて進んでいるようなものである。羅針盤を持たなければ何処にたどり着くか、何処で人生を踏み外し溝に落ち込むかわからない。人生のゴールが近づいてくると、進む方向はこれで良いのか、目指す目標はこ

れで良いのか、気になってくる。さらにコロナ騒ぎのようなことが起こるとさらに不安が増幅する。

今までは趣味三昧の生活を楽しんでいた。料理教室の仲間、写真サークルの仲間、学生時代の仲間と人間関係には不自由をしなかった。それが昨年からは一変した。交流が遮断され自宅に閉じこもっていると、我慢の限界が来て仲間が恋しくなり日々の時間を持て余すようになる。人との交わりを断たれると今までは感じなかった不安が募る。これからどうしよう…。しかし私には進むべき道、目指すべき目標と、確かな羅針盤が与えられ、全ては整えられていることに気付かされる。

何故なら日曜日に教会に集い、なるべく会話をしないで帰宅して心落ち着き不安は拭かれる。さらに自信と確信が湧いてくる。

このコロナ騒ぎも悪いことばかりではなく、いかなる時にも必要なものを全て与えられていることを知る良い機会になる。不安や焦りよりも自分の置かれている場所を見つめ直して、与えられている恵みを感じることが大切である。

私の戦争体験記

上海からの引き揚げ(その2)

森口千津子

昨年の『栄光』8月号に、終戦後上海から引き揚げ、博多港へ帰国した(昭和21年4月15日)ことを書きましたが、その航海の途中でも様々な出来事がありました。

MPの検査を通して、やっと乗船したもの、民間人の居場所が雑魚寝同然のような状態でした。まだ1才半でオシメを付けていた妹は始終お漏らしし、その苦情に母は困惑していました。見かねて父が交渉したのでしょうか、船の事務長さんの個室に入ることが出来ました。後から母に聞いたのですが、父の腕時計となにかの物と引き換えだったそうです。出航後も、海上の魚雷を避けるためしばしば停滞し、困難なものでした。そんな中でも5才の私は元気に駆けずり回り、同じ歳位のお友達も出来ました。また明日、此処で待ち合わせましようという約束なのに、2、3日姿が見えなかったら電撃疫病で亡くなっていました。その当時、上海で流行っていて、

子どもは一夜にして死んでしまう

と言われていた恐ろしい病気でした。私の両親は、アルコール綿の入ったステレンスの缶をいつも持つていて、用心してくれていました。白いシャツに包まれた小さな遺体を抱き締めて泣いていたお友達のお母さんが、約束の場所に立っていた私を見つめ「あ、あの子だわ、お友達が出来たと言っていた子」と気づき、「お見送りして頂戴」と言われ、船首の誰もいないところで、船長とその子の家族が集まり、水葬をしました。小さな白い遺体を抱き締めて離そうとしないお友達のお母さん。その背中をお祖母さんが、そっと抱きかかえるようにして促し、海に流しました。「お花を投げて」と手渡された赤い花を手向け、それが生花だったのを覚えています。波間に浮かぶ白い遺体が船からどんどん離れていく光景は、今でもはっきり脳裏に焼きついてます。涙が出てきてしまいました……。

喜びでいっぱいでした。母が生涯記念にと取っていた切符で東京に向い、ひとまず父の友人の熱海の温泉旅館で、ひと息つき、父方の疎開している山梨県遠山へ向いました。田端の母方の家は戦災で焼失していました。遠山では農家の別棟を借りていました。ラジオから、並木路子が唄う「赤いリンゴに口唇よせて」が流れ、農家の子たちと振り付けて踊り唄ったり、農家のお嫁さんが機織をしていたので蚕の小屋へ出入りし、桑の葉を一緒に採りに行き、黒く熟した実を口いっぱい頬張ったり、笛吹川の支流の河原へ「つきみ草」を見に行ったりと、美しい日本の自然の中で飛び回っていました。母の方は、やっと持ってきた荷物の中から、着物などをお米に換えていたそうです。

母方の伯父から、上野の池之端に借家を借りたので来ないかと、ここでお世話になりました。上野動物園の裏門に近く、午後になると近所の子どもは中に入れてくれました。動物は猿とヤギ位しかいませんでしたがヤギが本当に紙を喰べるのに、びっくりしたものです。

だんだん戦後の復興が進み、引き上げ者の住宅が出来、中央区の月島に居が決まりました。父は銀行に戻ろうとしましたが、仕事は少ないのに皆戦地から帰ってくるという状況で、特技のある人は暫くそれをしていてください、ということ、GHQで通訳として勤め始めました。朝霞のキャンプのクリスマス・ダンスパーティーは華やかな会場で大音響のバンドが鳴り、別世界のようなものでした。

昭和23年、月島第二小学校に入學。隅田川沿いで、勝鬃橋は隣り、学校の屋上からは対岸の浜離宮がよく見え、寄り道をして帰ったものです。父も銀行に復職し、学校の前をダンブカーが頻繁に通る、晴海の埋立が始まりました。

東京の復興は進み、私たち一家も札幌へ転勤しました。この年まで生かされ感謝いっぱいです。

伝道師の書き込み

もう少し後になるかと思ってい
ましたが、先日私のところにもワ
クチンの接種券が届きました。さ
っそく接種の予約を取ってみたの
ですが、1度目の予約はすぐに取
れたものの、3週間後という制約
のある2度目の予約がなかなか取
れません。そういうわけで近頃は
教会でも家でも、ときおり予約画
面を開いて、予約の空きをチェッ
クするのが日課になりつつありま

す。

先日の「夏の集い」で種房正
勝・惇子牧師夫妻が、お話しくだ
さいました。お二人のように、60
歳、70歳で牧師を目指すというの
は、近頃ではあまり珍しくなくな
ったように思います。東京神学大
学に在籍していた頃のことを思い
起こしますと、各学年に1人か2
人は必ずと言って良いほど、勤め
を終えられてから献身なさる方が
おられました。私のように高校を
卒業してすぐに神学校に入るとい
う人は年に1人いるかないか

すから、近頃のことだけで言えば、
私の方がよほど珍しいということ
になりそうです。そうした人生の
大先輩と一緒に勉強するというの
は、私としては良い経験であった
と今でも思っています。真摯に学
ばれる姿勢を見るにつけ、こちら
も背筋が伸びるような思いになり
ました。…もともと、その思いに
行動が伴うとは限らないもので、
真摯な皆様を横目に居眠りするこ
ともしばしばでしたけれども。

東神大ではお話の中に出てきた
夜間講座に加えて、牧師にならず
とも神学を学ぶためのコースが設
立されています。神学を体系的に
学ぶことの面白さを紹介されてい
ましたが、私も共感しつつ聞いて
いました。教会で御言葉に聞き学
んでいた皆さんの点が、神学の
学びを通してきちんと線で結ばれ
たような感覚が、神学校に入って
最初の1年の学びの中にありまし
た。牧師になるかはともかく、こ
ういう神学の面白さ、というのは
是非におすすめるしたいものです。
夜間講座、いかがですか。

(狩野進之佑)

牧師の書斎から



緊急事態宣言とワクチン接種の
進捗状況により、今年は「初夏の
集い」ではなく「夏の集い」とな
りました。かつて当教会員だった
種房正勝牧師・惇子牧師がご奉仕
くださいました。70歳を過ぎて御
夫妻そろって神学校で学び、昨年
末接手を受領され、上野教会(三
重県)で牧会、伝道に励んでおら
れます。主の召しに応え、「どんな
願い事であれ、あなたがたのうち

二人が地上で心一つにして求め
るなら、わたしの天の父はそれを
かなえてくださる」(マタイ18・
19)ことを信じて歩んでこられた
のでしょう。力づけられ、喜びに
満ちた夏の集いとなりました。

その後、第1回目のワクチン接
種のため宮の坂区民センターに行
きました。「雷雨となるから徒歩
で」と妻に言われ、炎天下を20分
歩いて、情けないことにフラフラ
となりました。

センターの地下は広く、バスケ
ットコートほどの広さのホールが

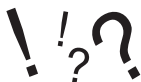
二つありました。一つで待ち、も
う一つで接種と休息です。座って
いるのは当然高齢者(65歳以上)
ばかり。自分もその仲間だと改め
て自覚させられました。それにし
ても礼拝に出席している教会員は
若々しい。80歳に手の届く種房牧
師御夫妻のような生き生きとした
方は見当たりませんでした。ワク
チン接種会場と礼拝では目的が全
く異なりますから雰囲気が違うの
は当たり前ですが、信仰ゆえの
若々しさだと勝手に考えました。
ワクチン接種は大切なことです

が、それで生き延びるのではありません。
ません。たとえ死んでも御国です。
そうとは限らないとしても、死と
その先のことをお任せできる方が
いてくださいます。90歳を過ぎた
方は生きたいとは言わず、早く御
国に逝きたいと教会では挨拶され
ます。今は忙しいので葬儀は勘弁
してほしいと答えます。

その場に47分いて帰ろうとした
ら本当に雷雨。世田谷線と小田急
線を乗り継いで経堂駅で小やみに
なるのを待ちました。

(岸 俊彦)

個人消息



掲示板



○振起日礼拝 9月5日(日) 午前10:15
 説教「イエス・キリスト 命に通じる門」
 ルカ 7:11-17
 神保 望 日本聖書神学校校長

編集後記



▽ステイホームで映画鑑賞の日々。最近観たものでは、『ユダヤ人を救った動物園』が良かったです。
 (酒井)

「栄 光」2021 年 8 月号
 日本基督教団 経堂北教会
 〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
 電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
 牧 師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑
 編 集：栄光編集委員会
 Email：kyodon@nifty.com
 HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

長老のファイル



コロナ禍で1年延期となった東京オリンピックが、4度目の緊急事態宣言の下で開催されました。日本でのワクチン接種は欧米と比べて遅れており、政府の予定通りには進んでいません。感染が拡大し、復興五輪の理念も薄れて中止を求める声が多かった中で、オリンピック開催です。2020年の国と地域から参加した選手たちの熱戦に感動しつつも、複雑な思いにな

りました。

この1年半、当教会では感染防止策を取りながら、休むことなく肅々と礼拝を守っています。礼拝のライブ配信を始めたことにより、遠方の方々とも繋がり、新たな出会いも生んでいます。この主の恵みに感謝せずにはいられません。

7月11日には、種房正勝・惇子牧師をお招きして「夏の集い」を行うことができました。お二人とも元教会員であり、70歳を過ぎてから神学校に通われて、献身して三重県伊賀市の上野教会で奉仕されて

9月5日には、日本聖書神学校の神保望校長をお招きして、振起日礼拝を行います。どうぞ、ご出席、または配信により礼拝をお守りください。

現在、感染防止策を取るため、礼拝前後も教会員同士でゆっくりお話しする時間はありません。ましてや、大勢での勉強会を行うことも出来ません。このような状況ですが、長老会では、教会員の学びのため、『聖餐の正しい執行についてQ&A』の小冊子を配布いたしました。改めて、聖餐の意味について各人で学んでいただくためのものですので、ぜひお目通しください。

酷暑のなかでのマスク生活が続きます。体調管理に十分気を付けて、無理はせずに、この夏を乗り切ってまいりましょう。

(酒井由紀子)